



中尾ハジメ

スリーマイル島

野草社

著者 中尾 ハジメ

1945年 生まれる

現 在 京都精華大学教員

訳 書 『性と文化の革命』(W・ライヒ) 1969年 勁草書房
『水俣』(ユージン・スミス, アイリーン・スミス)

1980年 三一書房

スリーマイル島

定価 1300円

1981年 9月 5日 第一版第一刷発行

著 者 中尾 ハジメ

発行所 株式会社 野草社

東京都文京区後楽2-20-15 内野ビル ☎03-812-8145 郵便振替東京1-37705

発売元 株式会社 新泉社

東京都文京区本郷2-15-20 ☎03-812-1662

印 刷 太平印刷社

製 本 美成社製本



日文 701724728

230862



中尾ハジメ

スリーマイル島

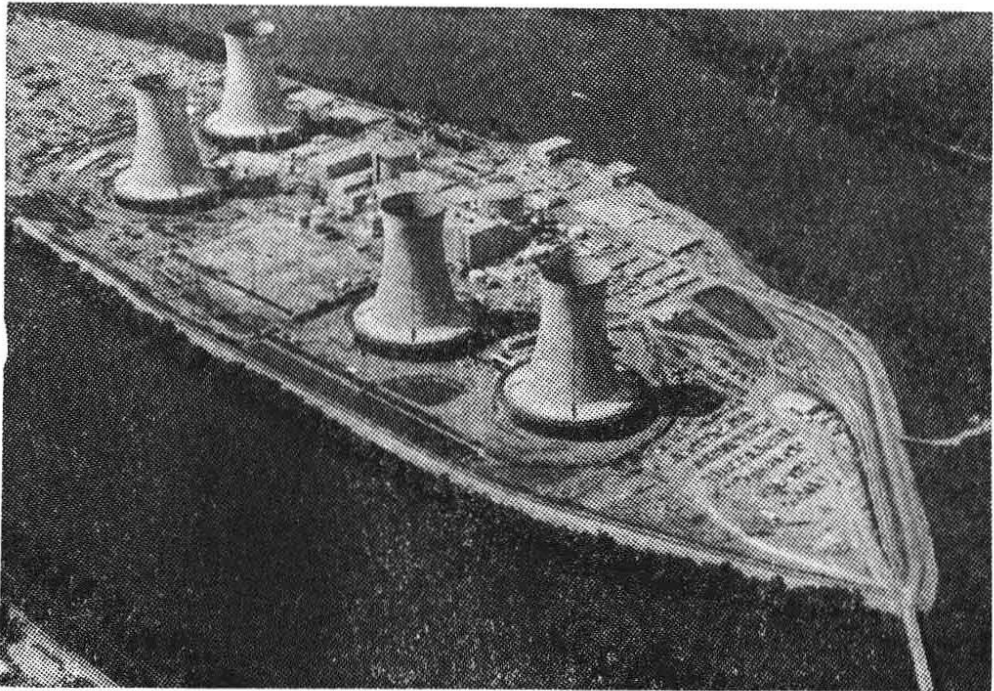
野草社

スリーマイル島目次

あとがき	X	IX	VIII	VII	VI	V	IV	III	II	I
.....										
204	195	185	155	135	109	81	53	35	13	5



I



スリーマイル島の事故を知ったのは一九七九年三月一九日の朝だった。「放射性蒸気漏れる米の原発 冷却水ポンプが壊れ」という見出しの短い記事が朝日新聞朝刊の第一面にあった。記事は小さかったが第一面にあることで異例であり、最大級の深刻さを意味していた。私たちが日本でこの朝刊をよんでいる時刻は、ペンシルバニアの現地では事故発生一日目、三月二八日の午後だった。現地では晩になって家にかえってはじめて事故のことを知る人たちも少なくなかったのだから、奇妙な感じにとらわれてしまう。

その日の夕刊で、ということは現地は二八日の夜中という時刻なのだが、各紙とも最大級の扱いをはじめた。朝日は「炉心破損の疑い 五百人汚染の恐れ 安全装置作動せず 十キロ先でも放射能」、毎日「史上最悪の原発事故に 冷却水漏れで拡大 従業員が放射能汚染か」、読売は「核燃料とけ出す」という大きな見出しをのせた。多くの人たちが事故三日目の三月三〇日になるまで事故の深刻さをまったく知らなかったという現地の状況とかさねあわせると、報道の奇妙なカタマリがみえてくる。

大事件を期待しながら新聞を手にとる読者の貪欲と、自分は安全圏にいるという思いこみという、私たちの例の皮肉な二重構造が顕在化しただけのことではない。原子力発電という、ま

るで巨大な機械装置のような社会制度に最初から組みこまれているかたよりではないのかと私は思う。たしかにこれはただの直観だといえればそれまでなのだけれど、この制度では人間が主人かどうかはまったく疑わしい。

発電所で「敷地内緊急事態」が発令されたのは午前七時まえだった。「一般緊急事態」の発令は約半時間後である。発電所の制御室にはコンピュータがあり、警報装置がはたらいた場合、どの警報装置かを知ることができ、また原子炉内の温度や圧力をくわしく知することもできるよう設計されていた。

ところが、このデータを打ち出すコンピュータには、予期せぬ落とし穴が待っていた。コンピュータは数多くの情報を短時間に処理することには極めてすぐれている。しかし、その処理したデータを人間（今の場合、運転員）に知らせるには、プリンターなどで打ち出すより方法がなかったのである。そのプリンターが一つの情報を打ち出してくるのに、実に約六秒もかかったのである。一秒間に一一もの情報が入ってくるのに、その情報をすべて打ち出すのには、実に一分間以上の時間を必要としたのである。

「そんな馬鹿な！」と思われるかもしれないが、その馬鹿なことが、近代技術の粋をこらしたはずの原発の中で現実化していたのである。二台のコンピュータの打ち出しは、どんど

ん遅れはじめた。コンピュータのふんづまりがおきたのであった。運転員は驚きあわてたことだろう。アラームはどんどん増えてくる。何がおきているのかを真っ先に知らせてくれるべきコンピュータが、のんびりとキーを打ち出している。

事故発生一時間後の五時〇分の時刻に、コンピュータが打ち出していたのは、実に事故発生一四分後の四時一四分の情報でしかなかったのである。実に四六分間もの情報遅れであった。事故発生から時間がたつにつれて、その時間遅れはどんどん大きくなり、七時少し前には、たまりかねてコンピュータ内のふんづまり情報を捨てさり、新しい情報を知ろうとしたのであった。それも、すぐに時間の遅れとなってあらわれた。

原子炉内に異常が発生していたことは明らかであった。放射線モニターも多量の放射線もれを示しはじめたのである。運転員は驚いた（事故発生一〇時間後には、その遅れは実に一六一分にも達したのであった）。

結局、七時前後に、あいづらいで「発電所内緊急事態宣言」「非常事態宣言」が出されることとなるのである。

（荻野晃也「隠されるTMI事故」、『技術と人間』一九八〇年四月号）

七時すぎには、敷地外での被曝線量を予測する計算が完了し、風下約二キロメートルのゴールズボロで時間あたり四〇レントゲンという数字がでた。いわゆる「生涯許容線量」を六時間ほどであびてしまう計算になる。この数字は、格納容器圧力が〇・一気圧強だったのを三・四

気圧で計算したための誤りだったといわれているが、私には真偽のほどはわからない。真だとすれば、格納容器内圧力にしたがって放射能もれ率をさしかえるだけで、すぐにより適切な解答がだされたはずではないのか。いまのところ私は、そういう訂正があったという記録を知らない。

いずれにしても放射能もれは周辺住民には知らされなかった。

住民に、それもたまたまハリス・バーグのラジオ局WKBOをきいていた住民に、すぐに目のまえの原子力発電所では故障があったが、島の外にはまったく危険がないというニュースがつたわったのは、八時二五分だった。九時すぎにAP通信が全国の新聞社、放送局にながした速報は、一般緊急事態が発令されたが放射能もれはない、というものだった。「一般緊急事態」の定義は「一般公衆の健康と安全に深刻な影響をおよぼすおそれのある事態」なのだから、矛盾もいいところだ。

住民が味わった不確かさの源泉は、発電所を目のまえにしながら、放送局をつうじての時間おくれの、それも希薄な、言葉の断片にたよらざるをえなかったことにもあったろう。多くの住民たちが、ニュースをきいて電話をかけてきたポストンやワシントンの親戚や友人から、はじめて、たいへんな事故だと教えられたことは特記事項である。情報の中央集中は歴然としている。

周辺市町村の長たちが、このことで怒っていたということは、皮肉なことに有名になり、全

国につたわった。ミドルタウンの市長ロバート・リードは八時四五分ごろから一般緊急事態がなになのかつかもうと、電力会社メトロポリタン・エジソン社とコンタクトをとろうとしていた。連絡がついたのは一時ごろだった。電力会社のゲーリン氏は、放射能もれはないとリード市長にいったが、一分もしないうちに市長が車のなかのラジオのスイッチをひねると、ニュースは放射能もれがあったとしゃべっていた。ハリスバーグの市長ポール・ドートリッチが事故を知ったのはボストンのラジオ局からの九時一五分にかかってきた電話取材でだった。

情報が地元にながれなかったというだけのことではない。それ以前にもっと深いところで、科学の誤用と、具体性の無意味化とでもよぶべきものが事態を支配していた。地域は、地域ゆえにもつはずの力をすでにうばわれている。

科学技術が大きなボロをみせたはずの出来事だったにもかかわらず、危機に際しての政策決定がことごとく科学技術に依存しているかのごとくみえた出来事でもあった。住民を退避させるかどうかは、結局のところは線量計の針がどこまでふれたかという報告や推定計算のはじきだす数字に頼らざるをえなかったかのようにみえるのだ。

貧弱な測定値をめぐって、技術官僚にまつわりついた記者たちの質問の雨や、水素爆発の可能性についての相違する推定にふりまわされた政策決定者たちの詳細をながとせるスペースはここにはないが、正直に言って、私たちがその場にいたとして、この依存の構造からど

れだけ自由でありえただろうか。しかし同時に、支配的立場にあるものは、すこしちがう身ぶりで事態をみていたということも疑いない。

三月二八日午前九時二二分、ゴールズボロでの空気サンプルから一ccあたり〇・〇一ピコキユリーのヨウ素一三一が検出され、九時五〇分には〇・〇一二ピコキユリーのヨウ素一三一が検出された。

四日間の火災で二〇、〇〇〇キユリーのヨウ素一三一を放出したといわれる一九五七年、イギリス、ウインズケール原子炉事故に匹敵するヨウ素放出が考えられていたはずである。ウインズケールでは事故のあいだ、施設内と周辺地域で約一三、〇〇〇の空気サンプルがとられ、最高一ccあたり〇・四五ピコキユリー、平均濃度は一ccあたり〇・〇〇四五ピコキユリーであった。

ゴールズボロでの検出濃度はウインズケールの平均よりもひとけた高いものだった。国際放射線防護委員会の連続被曝許容規準一ccあたり〇・〇〇三ピコキユリーの約三倍である。

ウインズケールの事故では周辺農場の牛乳がひどく汚染され、約二〇〇万リットルが海にすてられている。スリー・マイル島周辺の酪農地帯におなじようなことが危惧されて当然だったのではないか。じつはこのゴールズボロの空気サンプルの〇・〇一ピコキユリーは測定まちがいだとされている。あとで、州の放射線防護局の高精度の分析器にかけるとヨウ素は検出されなかったというのだ。しかし二八日の午前中はこの数値以外に頼るべきデータはなかったはず

なのだ。

州警察のヘリコプターでハリスバーグのホリー・スピリット病院にゴールズボロからの空気サンプルがはこばれたのは午前一一時前後であり、さらに放射線防護局にはこばれたのは一時一〇分だったといわれる。それから検出にどれくらいの時間がかかったのか知らないが、ス克蘭ントン副知事と昼の記者会見にでた放射線防護局のドーンサイフは、例によって健康にはまったく害がないという嘘をまじえてだけれども、ゴールズボロでヨウ素が検出されたことをしゃべっているのだ。彼らが大惨事——経済的な大損害——をおそれていなかったはずはない。

スリー・マイル島周辺の各農場が、牛乳会社から電話で、乳牛を畜舎にいれるよう指示されたのは、この二八日の午前中だった。牛乳会社はメトロポリタン・エジソン社からの助言だという。

この事実をきいた新聞記者ジム・ヒルが確認をしようと電力会社に連絡をとると、メトロポリタン・エジソン社は、当方はそのようなことは関知しないと否定したという。西岸にあるフィッシャー農場のジョアンが、牛乳会社の集荷係にきくと、ラジオで緊急事態解除のアナウンスがあるまでだという。「緊急事態がはじまっているなんていうアナウンスはきいてもいないのね」

II

「世界に、こんなことがあるものかね！ 世界に、幻術師と幻術の力がこんなにつよく、わしの主人のいい分別をこんなにかばかしい乱心にしてしまうつてことがあるものかね！

おお、旦那さま！ 旦那さま！ わしや、神様のお身分にちかつて言うだが、自分をよく見なせえよ。そして、自分の名譽をかんげえてね、おめえ様のところをみだして、だめにしちやつたくだらねえことを、信用しねえでくだせえ！」

「わしを大事に思えばこそ、おまえはな、サンチョ、そんな口をきくのじゃ」と、ドン・キホーテが言った。「それに、おまえは世の中のことに経験がないんで、多少の困難をとものうことがすべて、ありえないものと見えるのじゃ。だが、いつかも話したとおり、そのうちには慣れようし、わしがこの下で見てきたことを、またいろいろ話して聞かそうから、それで、おまえも、わしが今話したことを信ぜざるをえなくなるう。このことの真実は、言い返しもあげつらいも許さぬからな」

ニューヨーク州にはじまるサスケハナ川は南へくだりペンシルバニア州で北米大陸東部の長大な山脈、アパラチアの最東部を横ぎり、やがてチェサピーク湾へ、大西洋へと流れこむ。アパラチア山脈はいくえにも重なる大地の、森林におおわれたひだで、東から西へ、そして南西、南へとゆるやかに弧を描き、茫茫とつづく。平行してはしる、いくつものながい尾根と、ながい谷間の連続。

ペンシルバニアの州都ハリスバーグから山をのぞめば、四、五キロさきに、いちばん南の尾根ブルー・マウンテンが、川によってえぐられ、東西に分断されているのがみえる。ブルー・マウンテンのむこう側、北には、セコンド、サード、ピーターズ、ハーフ・フォール、ベリーまたマハンタンゴという名のついた尾根尾根が平行してはしる。セブン・マウンテンズ——七つの山——という呼びかたをきいたが、もうひとつ北にあるターキー・リッジ——七面鳥尾根——をいれてかぞえれば、七つではおさまらない。その北にもまだ尾根の繰りかえしはつづいている。サスケハナ川はその尾根尾根をことごとく東西に分断しながら流れている。氷河の浸蝕による溪谷なのだろう。

山脈を横ぎったあと、川はハリスバーグをとおりすぎ、なだらかな起伏のつづく酪農地帯の

なかを流れる。ハリスバーグから南東へ約一八キロくだったところで川は小高い丘陵を横ぎる。ブルー・マウンテンからくればかなり低い陵線は、川のなかに飛び石のような断片を残して、やはり東西につらなっている。川のなかの断片はヒル・アイランドと呼ばれる小高い島で、その北側には氷河期の遺物、大きな岩石が深い森の下に折りかさなっている。シカやウサギの猟場になっているこの森林島には、白人が征服する以前の住民が残した土器などがでるといふ。サスケハナ——泥の川という意味らしい——という言葉を残して、彼らはもういない。

丘陵を割った川はここで東から南へと流れをかせ、一キロほどだった川幅は二キロ半ほどにひろがる。そこにふたつ並ぶ大きな中洲のひとつがスリーマイル島だ。

一九七二年ときいたとおもうが、大水があつて中洲は完全に水没したことがあるという。スリーマイルアイランド原子力発電所一号基は建設中だったはずだ。一九七五年の大水のときにも付近の住民は避難したときいた。そのときには島が完全に水没することはなかったらしいが、いずれにしても、なぜそんなに条件の悪いところに発電所をつくったのか不思議に思つてあたりまえだ。

スリーマイル島は一九〇〇年前後にはすでに電力会社、あるいはその前身、の所有になつていたという。ペンシルバニア西部、オハイオ川流域のピッツバーグ産業地帯は、あるいは東にあるデラウェア川流域フィラデルフィア産業地帯は、すでに立地的に飽和状態だったのではないだろうか。あるいは飽和状態になることを先どりして、水量豊かなサスケハナ川流域を工業